

2. 事業の概要と成果	
(1) 上位目標	<長期目標> リンポポ州ベンベ郡における HIV 陽性者及びエイズに影響を受けている人々が心身ともに健康を維持することができ、HIV/エイズに対する差別・偏見が軽減され、HIV 感染拡大が抑えられる。 <プロジェクト目標> リンポポ州ベンベ郡マカド地区 9 村において、HIV 陽性者が健康を維持していくためのサポート体制が向上するとともに、HIV 陽性者を含む地域住民が効果的な HIV 感染拡大予防活動に取り組むことができるようになる。
(2) 事業内容	(●＝実施した事項 ▼＝実施が遅れている事項) <u>(イ)地域で患者をケアする在宅介護ボランティア(Home Based Care Volunteer、以下 HBCV)の育成</u> ①HBCV の能力向上のための研修(HIV/エイズ治療に関する研修、救急法研修、カウンセリング法研修)、②他村、他 NGO の経験から学ぶための経験交流の実施 ● 予定していた新規パートナー選定のため、活動地内で HBC 活動をする NGO を約 20 団体訪問し、その中から 4 月までに 2 団体と活動の協働のための調整に入った。 ● 事業一年次に行なったエイズ治療研修、応急法研修の成果を図るため、11 月～2 月にかけて活動 9 カ村全てにおいて HBC ボランティアの家庭訪問に同行、ワークショップを実施し評価活動を行なった。その結果、研修の成果が活動に表れはじめていることを確認した。 <u>(ロ)ケアの必要な子どもの世話をするボランティア(Drop In Center Volunteer/Early Child Development Volunteer、以下 DICV/ECDV)の育成</u> ①DIC ボランティアの能力向上のための研修(イと同様)、②子ども同士の経験交流、③子どものケアセンター(DIC)に対する、楽器や本などの教材提供 ● 11 月 30 日に、キャンプ場にて子どもの経験交流イベントを実施、約 150 名の子どもたちが参加した。 ● 2 月 20 日に、一年次に実施したカウンセリング研修の振り返りのためのワークショップを実施した。 ● 第一年次に開始した子どもの世帯調査を継続して実施。子どもたちが学校の短期休暇に入る 4 月 1～3 日には JVC スタッフも調査に同行した。 ● 5 月第二週に DICV が互いの活動から学ぶための村間の経験交流の第一回を実施した。振り返りを行い、今後随時村間の交流を実施していく。 ▼ 5 月に予定されていた子どもプログラム研修、救急法研修レベル2は、実施時期を見直し、9 月以降に実施される。 <u>(ハ)HBCV、DICV による予防啓発活動が強化される</u> ● 第一年次のエイズ治療研修を受け、HBCV は家庭訪問の際に日々エイズに関する啓発を実施している。とくに、母子感染予防などに関して、早い段階

	での HIV テストを促している。 (二)HIV 陽性者自身によるケアの質の向上と予防啓発活動の促進 ①HIV 陽性者が自身をケアできるようになるための研修、②経験交流、④予防啓発活動の促進 ● 二年次四期以降の活動としているため、記載なし。 (ホ)生活改善のための家庭菜園づくり ①家庭菜園づくり研修、②技術定着のためのモニタリング、③経験交流 ● 3 月 17～19 日、ヒヤンガナニ・タウンシップの DIC で菜園研修を実施した。一年次に同 DIC に菜園を設置したが、うまく維持されていなかったことから再度研修を実施した。 ● 4 月 8～10 日、ンジャカンジャカ村 DICV6 名を対象に菜園研修を実施した。研修を通し、同 DIC に野菜を提供するための菜園を設置した。 ● 4 月 14、15 日に、リンポポ州大学と協同で実施する予定の栄養実態調査の調査手法の研修を、同大学の協力の下おこなった。今後、6 月以降に調査を実施し、研修内容を精査していく。 ● 5 月 1～2 日、15～16 日に一年次に育成した菜園ファシリテーターが中心となり、それぞれ 5 名、7 名の村内住民を対象とした菜園研修を実施した。 ● これまでに菜園研修を受けた住民のモニタリングを適時実施している。
(3)達成された効果	＜期待される成果と指標＞ イ. HIV 陽性者やエイズの影響を受ける人びとが地域で適切にケアされるようになる。 ⇒一年次に実施した研修の成果として HBCV がエイズ治療研修で学んだ知識や情報を生かして、患者にケアを提供していることが、その後の評価活動を通して確認された。HIV ステータスを明かしていない患者が、HBCV がエイズ治療に関しての知識を得たことを知り、信頼を寄せて相談に来るなどの行動変容が見られている。また、救急法も実践に生かしており、怪我をした患者の応急を行った、やけどの治療をしたなどの実践例が報告された。 ロ. エイズの影響を受ける子どもが地域で適切にケアされるようになる。 ⇒第一年次に受けた救急法の研修の成果が発揮されている。DIC 内で起こった怪我などの対応に加え、学校で日射病の子どもが出たときに呼ばれるなど、DICV が救急法の知識をもつことが地域内で知られ、頼られる存在となることが確認された。 ⇒カウンセリング研修を経て、DICV は子どもたちに対するケアの提供に大きく自信をつけたと語っている。また、研修後はじめた世帯調査により、保護者や子どもたちから、子どもたちの生活状況や DIC に期待されることなどの情報を積極的に集めており、今後の活動改善に生かされることが期待される。 ハ. HBCV、DICV による予防啓発活動が強化される。 ⇒HBCV について、エイズ治療研修で得た知識を活用し、家庭訪問時に予防啓発を積極的に行っていることが確認された。とくに母子感染予防の分野では、妊婦に積極的にアプローチし、妊娠発覚後早い段階での HIV 検査の受診を促すなど、今までにはない対応が実際に確認された。 ⇒DICV については、子どもたちの家庭訪問の際に、保護者などを通じてエイズ予防に関する話しをしている。子どもたちを対象とした啓発活動は今後 DIC や学校などで予定されている。 ⇒一村の DIC で、子どもたちが学校で出された HIV/エイズについて調べる課題を手伝ったところ、内容が非常にいいということで、校長から学校で予防啓発の話をしてほしいとアプローチされた。このように DICV の知識向上について地域の認

	識も広がり、連携の事例が見られるようになっている。 ニ. HIV 陽性者自身によるケアの質が向上するとともに HIV 陽性者自身が地域で予防啓発活動を実施できるようになる。 ⇒ 第二年次後半より実施予定のため、現時点で効果を図ることはできない。 ホ. 家庭菜園によって栄養／生活状況が改善される。 ⇒ 第一年次に育成した菜園ファシリテーターが中心となり、参加者を特定、研修を実施するまでに至ったことで、今後活動がさらに広がっていくこと、また地域内で菜園活動が持続されていくことが期待される。
(4) 今後の見通し	<u>(イ) 地域で患者をケアする在宅介護ボランティア (Home Based Care Volunteer、以下 HBCV) の育成</u> 新規パートナー団体の目途が立ったことから、菜園活動に関してはすでに調査を開始しており、随時研修をはじめていく段階にある。また、今後～7 月までに共同で研修などの実施計画を立て、随時研修を行っていく。 <u>(ロ) ケアの必要な子どもの世話をするボランティア (Drop In Center Volunteer/Early Child Development Volunteer、以下 DICV/ECDV) の育成</u> 研修時期の変更などはあるが、ほぼ予定通りに実施されており、今後も事業が進んでいくことが予測される。 <u>(ハ) HBCV、DICV による予防啓発活動が強化される</u> 今年度の計画を立てるワークショップを DICV と実施した際に、自ら学校などで積極的に啓発活動を行なうことが提案された。また、HIV 啓発に加えとくに 10 代での妊娠に焦点を当てたキャンペーンを実施したいなど、今後地域内の子どもたちを対象とした予防啓発活動が積極的に実施されることが期待される。 <u>(ニ) HIV 陽性者自身によるケアの質の向上と予防啓発活動の促進</u> 申請書にあるように、新規のパートナー団体の HBCV を通して地域の個々の陽性者と関係を作っていくことができるか今後模索していく。 <u>(ホ) 生活改善のための家庭菜園づくり</u> 一年次に育成した菜園ファシリテーターによる研修が実施されている。これにより、研修の頻度が増え、より密接にモニタリングができるようになっていくことを目指している。経験交流の実施などは遅れているが、上記研修により参加者が増えることで、今後効果的に経験交流の機会を持つことが期待される。